神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Commentaries on the Zhongguo xiaoshuo shilüe (Lu-xun's a brief history of Chinese fiction) (Ⅸ)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1990-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中嶋, 長文, Nakajima, Osafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2255

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

中國小說史略考證 第九

中島長文

第九篇　唐之傳奇文（下）

1 然傳奇諸作者中、以至李公佐　　八(十一

『大略』鉛印本八云、然傳奇諸作者中、有特可置重者二人。其一、所作不多而影響甚大、名亦甚盛者曰元稹。其二、多所著作、影響亦甚大而名不甚彰者曰李公佐。寫印本は編成がちがうのでこれに相當する部分はなく、殊に李公佐についての評語は一語もない。

「小說的變遷」第三講云、唐之傳奇作者、除上述以外、于後來影響最大而特可注意者、又有二人。其一著作不多、而影響很大、又很著名者、便是元微之。其一著作多、影響也很大、而後來不甚著名者、便是李公佐。現在我把他兩人分開來說一說。

2 元稹字微之、以至止『鶯鶯傳』一篇　　八(一—八

『大略』寫印本には元稹の傳記的記事はなく、鉛印本に至って附加された。鉛印本と『史略』とのちがいは、『史略』が「五年七月暴疾、一日而卒于鎭、時年五十三（七七九—八三一）」とする所を「年五十三卒」と一句でかたづける部

分のみである。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴全集卷十云、元稹字微之、河南河内人、以校書郎累仕至中書舍人、承旨學士。由工部侍郎入相、旋出爲同州刺史、改越州、兼浙東觀察使。太和初、入爲尚書左丞、檢校戶部尚書、兼鄂州刺史武昌軍節度使。五年七月、卒於鎭、年五十三。兩『唐書』（舊一六六新一七四）皆有傳。於文章亦負重名、自少與白居易唱和。當時言詩者稱「元白」、號爲「元和體。」有『元氏長慶集』一百卷、『小集』十卷、今惟『長慶集』六十卷存。「鶯鶯傳」見『廣記』四百八十八。

『舊唐書』卷一六六元稹傳云、元稹字微之、河南人。中略。稹九歲能屬文。十五兩經擢第。二十四調判入第四等、授秘書省校書郎。二十八應制舉才識兼茂、明於體用科、登第者十八人、稹爲第一、元和元年四月也。制下、除右拾遺。中略。爲執政所忌、出爲河南縣尉。丁母憂、服除、拜監察御史。中略。執政以稹少年後輩、務作威福、貶爲江陵府士曹參軍。稹聰警絕人、年少有才名、與太原白居易友善。工爲詩、善狀詠風態物色、當時言詩者稱元白焉。自衣冠君子、至閭閻下俚、悉傳諷之、號爲「元和體」。既以俊爽不容於朝、流放荆蠻者僅十年。俄而白居易亦貶江州司馬、稹量移通州司馬。雖通江懸邈、而二人來往贈答、凡所爲詩、有自三十五十韻乃至百韻者。江南人士、傳道諷誦、流聞闕下、里巷相傳、爲之紙貴。觀其流離放逐之意、靡不悽惋。十四年、自虢州長史徵還、爲膳部員外郎。中略。荆南監軍崔潭峻甚禮接稹、不以掾吏遇之、常徵其詩什諷誦之。長慶初、潭峻歸朝、出稹連昌宮辭等百餘篇奏御、穆宗大悅、問稹安在、對曰「今爲南宮散郎。」即日轉祠部郎中、知制誥。中略。居無何、召入翰林、爲中書舍人、承旨學士。中人以潭峻之故、爭與稹交、而知樞密魏弘簡尤與稹相善、穆宗愈深知重。河東節度使裴度三上疏、言稹與弘簡爲刎頸之交、謀亂朝政、言甚激訐。穆宗顧中外人情、乃罷稹内職、授工部侍郎。上恩顧未衰、長慶二年、拜平章事。詔下之日、朝野無

不輕笑之。中略。乃出稹爲同州刺史、中略。在郡二年、改授越州刺史、兼御史大夫、浙東觀察使。中略。太和初、就加檢校禮部尙書。三年九月、入爲尙書左丞。中略。四年正月、檢校戶部尙書、兼鄂州刺史、御史大夫、武昌軍節度使。五年七月二十二日暴疾、一日而卒于鎭、時年五十三、贈尙書右僕射。中略。所著詩賦詔冊銘誄論議等雜文一百卷、號曰『元氏長慶集』。又著古今刑政書三百卷、號類集、並行於代。

新『唐書』卷一七四元稹傳云、元稹字微之、河南河內人。中略。九歲工屬文、十五擢明經、判入等、補校書郎。元和元年舉制科、對策第一、拜左拾遺。中略。當路者惡之、出爲河南尉、以母喪解。服除、拜監察御史。中略。宰相以稹年少輕樹威、失憲臣體、貶江陵士曹參軍、而李絳、崔羣、白居易皆論其枉。久乃徙通州司馬、改虢州長史。元和末、召拜膳部員外郎。稹尤長於詩、與居易名相埒、天下傳諷、號「元和體」、往往播樂府。中略。稹之謫江陵、善監軍崔潭峻。長慶初、潭峻方親幸、以稹歌詞數十百篇奏御、帝大悅。問稹今安在。曰「爲南宮散郎。」卽擢祠部郎中、知制誥。中略。俄遷中書舍人、翰林承旨學士。中略。而出稹爲工部侍郎。然眷倚不衰、未幾、進同中書門下章事、朝野雜然輕笑。中略。遂與度偕罷宰相、出爲同州刺史。再期、徙浙東觀察使。中略。大和三年、召爲尙書左丞、中略。俄拜武昌節度使。卒、年五十三、贈尙書右僕射。

3 八〇—七

『鶯鶯傳』者、以至時人多許張爲善補過者云

『大略』寫印本九云、元稹鶯鶯傳（廣記四百八十八）／貞元中、有張生者、性溫貌美、非禮不動、年二十三未嘗近女色。時生游于蒲、寓普救寺、適有崔氏孀婦將歸長安、過蒲、亦寓玆寺。是歲渾瑊薨、軍人因喪大擾蒲人、崔氏甚惧、而生與蒲將之黨有善、請吏將護之。十餘日後廉使杜確來治軍、軍遂戢。崔氏由此甚感張生、因招醼、見其女鶯鶯、生惑焉、託崔之婢紅娘以春詞二首通意、是夕得綵牋、題其篇曰明月三五夜、其詞曰、

待月西廂下　迎風戸半開、拂牆花影動　疑是玉人來

張喜且駭、已而崔至、則端服嚴容、責其非禮、竟去、張自失者久之。數夕後崔又至、將曉而去、是後十餘日杳不復知、張因賦會眞詞三十韻以貽之、遂復來、出入于所謂西廂者幾一月。無何、張生往長安、明年文戰不勝、遂止于京、貽書于崔以廣其意、崔報之、而張發其書於所知、由是爲時人傳說。楊巨源爲賦崔娘詩、元稹亦續生會眞詩三十韻、張之友聞者皆聳異、而張志亦絶矣。元稹與張厚、問其說、

張曰大凡天之所命尤物也不妖其身必妖于人使崔氏子遇合富貴秉嬌寵不爲雲爲雨則爲蛟爲螭吾不知其變化矣昔殷之辛周之幽據萬乘之國其勢甚厚然而一女子敗之潰其衆屠其身至今爲天下繆笑予之德不足以勝妖孽是用忍情後歲餘、崔已適人、張亦別娶、適過其所居、請以外兄見、崔終不出、張怨念之誠動於顏色、將行、賦詩一章以絕之云、棄置今何道、當時且自親、還將舊來意、憐取眼前人。時人多許張爲善補過者。（鉛印本は最後の一節の「越歲餘」「後數日、張生將行、崔則賦詩一章以謝絕之云」の二句を寫印本に同じくする他は、すべて『史略』に同じ。

「鶯鶯傳」を「會眞記」とするテキストは『會眞六幻』、『說郛』宛委山堂本一一五、『五朝小說』、『唐代叢書』等の通行本、および『西廂記』附刻本である。なお最近の研究が「鶯鶯傳」はもと「傳奇」と呼ばれたとすることについてはすでに8—1で觸れた。いま卞孝萱「『鶯鶯傳』的原標題及寫作年代」（『唐代文史論叢』山西人民出版社・一九八六）がその證據とするものを擧げれば、（一）『類說』所收の『異聞集』中の「鶯鶯傳」が「傳奇」と題されていること。（二）宋人王銍「傳奇辨正」中、「鶯鶯傳」のことを何度も「傳奇」と稱していること。（三）宋人趙令畤『侯鯖錄』卷五「元微之崔鶯商調蝶戀花詞」序で「夫傳奇者、唐元微之所述也」といっていること。（四）宋人傅干「注坡詞」で「鶯鶯傳」を引いて「傳奇」と稱していること。（五）金人元好問『遺山樂府』卷中「江梅引」序に「骨化

形銷、丹誠不泯、因風委露、猶托清塵。是崔娘書詞、事見元相國傳奇」といっていること。以上五つの證據から「鶯鶯傳」の原名は「傳奇」であったろうとする。卞氏の他、周紹良「『傳奇』箋證」（『紹良叢稿』齊魯書社・一九八四）もほぼ同じ根據によって原題を「傳奇」とする。

魯迅の引く「鶯鶯傳」原文は『廣記』にも通行本にも『西廂記』附刻にも似ない。それらを通じて『史略』所引と異るのは「張生將至長安」の「至」を各本「之」とし、「宛然無難詞」の「然」字がないことである。そしてほとんどが「將行之夕」を「將行之再夕」とすることである。これらは筆誤脫誤ということも考えられる。以下に主な異同を摘記する。「不可復見」は『廣記』、「遂西下」は『廣記』だが、通行本や『西廂記』附刻本は「遂西。不數月」と、「下」ではなく「不」として下に連けて點を切るものが多い。「秉嬌寵」、「嬌寵」は主に附刻本。『廣記』、通行本は多く「寵嬌」とし、かつ「秉」とするのは『廣記』黃刻本のみで他はみな「乘」とする。「不爲雲爲雨、則爲蛟爲螭」は通行本、附刻本で、『廣記』は「不爲雲、不爲雨、爲蛟、爲螭」とする。「據萬乘之國」の「萬乘」は附刻本がみなそう作り、通行本、『廣記』は「百萬」に作る。「吾不知其變化矣」は附刻本みなそう作り、通行本、『廣記』は「吾不知其所變化矣」に作る。

以上の異同から見れば、魯迅は『廣記』黃刻本をベースに『西廂記』附刻本を參考に意を以て改めたと考えられる。逆であれば朱朝鼎『新校注古本西廂記』系の附刻をベースに、――なぜならばこのテキストだけが附刻本の中で「遂西下」に作るが、他本はすでに述べたように「遂西。不數月」に作る。蒲州から長安へ行くのを「西下」と言うかはともかくとして、他の附刻や通行本で十分に讀めるから、わざわざ「不」を「下」に改める理由はないと思われるからである――黃刻『廣記』によって改めたということになる。

なお、ここにいう『廣記』は、談愷刻本、黃刻本（槐蔭草堂本、道光重刻本）、中華書局排印本。通行本は『虞初志』本、『說郛』宛委山堂本、『唐代叢書』本、『龍威秘書』本、『舊小說』本。『西廂記』附刻本は、『新校古本西廂記』本、槃邁碩人增改完本（中華書局影印本）、毛西河論定本、彙刻傳奇本（暖紅室刊本）又『重編會眞雜錄』本（暖紅室刊、これには關連資料が集められていて便利である）、『西廂會眞傳』本（香港中文大学影印本）、『貫華堂第六才子書』（世德堂刊）本、『箋釋第六才子書釋解』（吳山三婦合評、致利堂刊）本、『繡像第六才子書』（槐蔭堂刊）本、後の三本は金聖嘆本でその巻三に『會眞記』を収める。

4 元稹以張生自寓、以至『柳毅傳』而已　六二十二

寫印本『大略』九云、李霍事迹、世不甚傳、惟湯顯祖翻案爲紫釵記。至于張崔、則人多樂道、宋趙德麟已演其事爲蝶戀花十闋（見侯鯖錄）、其後乃有元人董解元西廂記、王實甫西廂記、關漢卿續、明人李日華南西廂記、陸采南西廂記等、其實微之原作、文非上乘、事復卑淺、而自宋迄今、常爲戲曲之中樞、有大影響於文學史、則亦文界之異事也。鉛印本は「關漢卿『續西廂記』を寫本に同じくする他はすべて『史略』に同じい。

「小說的變遷」第三講云、一、元微之的著作、元微之名稹、是詩人、與白居易齊名。他做的小說、只有一篇『鶯鶯傳』、是講張生與鶯鶯之事、這大概大家都是知道的、我可不必細說。微之的詩文、本是非常有名的、但這篇傳奇、却并不怎樣傑出、況且其篇末叙張生之棄絕鶯鶯、又說什麼「……德不足以勝妖、是用忍情。」文過飾非、差不多是一篇辯解文字。可是後來許多曲子、却都由此而出、如金人董解元的『弦索西廂』、——現在的『西廂』、是扮演、而此則彈唱——元人王實甫的『西廂記』、關漢卿的『續西廂記』、明人李日華的『南西廂記』、陸采『南西廂記』、……等等、非常之多、全導源于這一篇『鶯鶯傳』。但和『鶯鶯傳』原本所叙的事情、又略有不同、就是、叙張生和鶯鶯到後來終于

團圓了。這因爲中國人的心理、是很喜歡團圓的、所以必至于如此、大概人生現實底缺陷、中國人也很知道、但不愿意說出來。因爲一說出來、就要發生「怎樣補救這缺點」的問題、或者免不了要煩悶、要改良、事情就麻煩了。而中國人不大喜歡麻煩和煩悶、現在儻在小說裏叙了人生底缺陷、便要使讀者感着不快。所以凡是歷史上不團圓的、在小說裏往往給他團圓。沒有報應的、給他報應、互相騙騙。——這實在是關于國民性底問題。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴(全集卷十)云、其事之振憾文林、爲力甚大。當時已有楊巨源李紳輩作詩以張之、至宋、則趙令畤拈以製「商調蝶戀花」(在『侯鯖錄』中)。金有董解元作『絃索西廂』、元有王實甫『西廂記』、關漢卿『續西廂記』。明有李日華『南西廂記』、陸采亦有『南西廂記』、周公魯有『翻西廂記』。至清、查繼佐尙有『續西廂』雜劇云。／因「鶯鶯傳」而作之雜劇及傳奇、曩惟王關本易得。今則劉氏暖紅室已刊『絃索西廂』、又聚趙令畤商調蝶戀花等較著之作十種爲西廂記十則。市肆中往往而有、不難致矣。／「鶯鶯傳」中已有紅孃及歡郎等名、而張生獨無名字。王楙『野客叢書』(二十九)云、『唐有張君瑞、遇崔氏女于蒲。崔小名鶯鶯。元稹與李紳語其事、作「鶯鶯歌」。」客中無趙令畤『侯鯖錄』、無從知「商調蝶戀花」中張生是否已具名字。否則宋時當尙有小說或曲子、字張爲君瑞者。漫識於此、俟有書時考之。『商調蝶戀花』では張生の名はまだない。

鹽谷溫『支那文學概論講話』第六章唐代小說云、抑〻會眞記は他の傳奇と異り、元微之の自筆でしかもその自傳であります。記中の張生は卽ち微之自身でその表妹(イトコ)を誣ひて作つたものであると申します。それに就ては諸家の考證もあり、微之の作る所の姨母鄭氏墓誌、及び白樂天の作る所の微之の母、鄭夫人墓誌等に據つて、微之と鶯鶯との關係を明にすることが出來ます。それによると微之の母は鄭濟の女で鶯鶯の父崔鵬も亦鄭濟の女を娶つて居りますから、兩人の母は姉妹で微之と鶯鶯とは中表(イトコ)になるのであります。傳奇に鄭氏を指して異派之從母となすのと合つて居りま

す。近頃文求堂主人が唐故滎陽鄭府君(恒)夫人崔氏合祔墓誌銘の拓本を手に入れて、之を玻璃版に付して同好に頒ちましたが、然し之には古來是非の論があつて、恐くは好事者の僞撰ではあるまいかと思はれます。よし本物としても、その崔氏は記の鶯鶯より長ずること四歳でありますから、自ら別人でありませう。／會眞記は私期密約の歡會を記したもので、事柄もさほど面白くもなし、文章も特に出色といふのではありませぬが、兎に角元才子の名を以て藝苑に艶稱せられ、これ程後世にもてはやされたものはありませぬ。卽ち趙德麟の商調鼓子詞——董解元の西廂搬彈詞——王・關の西廂雜劇——明人の西廂傳奇と轉じ來つた、會眞記の末流を尋ぬれば、宋・金・元・明間に於ける聲曲發達の沿革を最も明白に知ることが出來ます。換言すれば會眞記は常に支那戲曲の中心となつて發達し來つたのであります。觀じ來れば會眞記の支那文學史上に殘した功績は常に偉大なるものであります。

趙德麟『侯鯖錄』卷五 辨傳奇鶯鶯事云、王性之作傳奇辨正云、嘗讀蘇翰林贈張子野詩、有云詩人老去鶯鶯在。注言所謂張生乃張籍也。僕按元微之所傳奇鶯鶯事、在貞元十六年春、又言明年生文戰不利、乃在十七年。而唐登科記張籍以貞元十五年商郢下登科、旣先二年、決非張籍明矣。每觀其文、撫卷歎息、未知張生果爲何人。意其非微之一等人不可當也。會淸源莊季裕爲僕言、友人楊皐公嘗得海虞本讀。微之所作姨母鄭氏墓誌云、其旣喪夫遭軍亂、微之爲保護其家備至、則所謂傳奇者、蓋微之自叙、特假他姓以自避海虞本自避作避就。耳。僕退而考微之長慶集、不見所謂鄭氏誌文、豈僕家所收未完、或別有他本爾。然細味微之所序、及考于他書、則與季裕所說皆合、蓋昔人事、有悖於義者、多託之鬼神夢寐、或假之他人、或云見他書、後世猶可考也。微之心不自聊、旣出之翰墨、姑易其姓氏耳。不然爲人叙事、安能委曲詳盡如此。按樂天作微之墓誌、以大和五年薨、年五十三、則當以大歷十四年己未生、至貞元十六年庚辰、正二十二歳。傳奇言生年二十二歳未知女色。又韓退之作微之妻韋叢墓誌、文作壻韋氏時微之始以選爲校書郎、正傳奇所謂後歳餘生亦

有所娶者也。貞元十八年、微之始中書判拔萃、授校書郎、二十四歲矣。又微之作陸氏姊誌云、予外祖父授睦州刺史鄭濟。白樂天作微之母鄭夫人誌、亦言鄭濟女、而唐崔氏譜永寧尉鵬、亦娶鄭濟女、則鶯鶯者乃崔鵬之女、於微之爲中表。正傳奇所謂鄭氏爲異派之從母者也。非特此而已、僕家有微之作元氏古豔詩百餘篇中有春詞二首、其間皆隱鶯鶯字、傳奇言立綴春詞二首以授之、不書諱字者卽此意。及自有鶯鶯詩、離思詩、雜憶詩、與傳奇所載猶一家說也。又有古決絕詞夢遊春詞、前叙所遇、後言捨之以義、又叙娶韋氏之年、與此無少異者、夢遊春詞云、當年二紀初、佳節三星度、韋門正全盛、出入多歡裕。二紀初謂二十四歲也。其詩中多言雙文、意謂芸窗本必二鶯字爲雙文也。併書于後、使覽者可考焉。又意古豔詩多微之專因鶯鶯而作無疑。又微詩百韻寄樂天云、山岫當堦翠、牆花拂面枝、鶯聲愛嬌小、燕翼玩遲遲。注云、昔予賦詩云、爲見牆頭拂面花。時唯樂天知此事。又云、幼年與蒲中海演本東。詩人楊巨源友善、日課詩傳奇言生發其書於所知、予立聞其說、生所善楊巨源爲賦崔娘詞一絕。凡是數端有一於此可驗、決爲微之無疑、況於如是之衆也。然必更以張生者、豈元與張、受姓命氏、本同所自出耶。張姓出黃帝之後、元姓亦然。後爲拓拔氏、後魏有國、改號爲元氏。僕性喜討論、考合同異、每聞一事隱而未見、或可見而事不同、如瓦礫之在懷、必欲討閱、歸於一說而後已。嘗謂讀千載書、而探千載之迹、必須盡見當時事理、如身履其間、絲分縷解、始終備盡、乃可以置議論。若略執一言一事、未見其餘、則事之相戾者多矣。又謂前世之事、無不可考者、特學者觀書少而未見爾。微之所遇合、雖涉於流宕自放、不中禮義、然名輩風流餘韻、照曜後世、亦人間可喜事、而士之臻此者特鮮也。雖巧爲避就、然意微而顯、見於微之其他文辭者、彰著又如此、故反復抑揚、張而明之、以信其說。他時見所謂姨母鄭氏誌、文當詳載於後云。知不足齋叢書本。後に文中に言う元稹の諸詩並びに「微之年譜」を載せるが今略す。

又趙德麟「元微之崔鶯鶯商調蝶戀花」詞序云、夫傳奇者、唐元微之所述也。以不載於本集、而出於小說、或疑其非是。今觀其詞、自非大手筆、孰能與於此。至今士大夫極談幽玄、訪奇述異、無不擧此爲美話。至於娼優女子、皆能調

說大略。惜乎、不被之以音律、故不能播之聲樂、形之管絃、好事君子極飲肆歡之際、願欲一聽其說、或擧其末而忘其本、或紀其略而不及終其篇、此吾曹之所共恨者也。今於暇日、詳觀其文、略其煩褻、分之爲十章、每章之下、屬之以詞。或全撫其文、或止取其意。又別爲一曲、載之傳前、先叙前篇之義。調曰商調、曲名蝶戀花。句句言情、篇篇見意、奉勞歌伴、先定格調、後聽燕詞。同上。なお『唐人小說』が上述の全文を引く。

「李紳楊巨源輩各賦詩」、楊巨源の「崔娘詩」は傳文中に見えるが、李紳のは傳文中に「公垂卓然稱、遂〝鶯鶯歌〟以傳之」とあるだけで「歌」そのものは載せない。戴望舒「李紳〝鶯鶯歌〟逸句」(『小說戲曲論集』所收)は『全唐詩』四八三および董解元『絃索西廂』から逸句を集めている。

王國維『曲錄』卷四云、西廂一本明閔刻朱墨本　金董解元撰。解元、輟耕錄云、金章宗時人、名里無考。毛西河詞話謂、解元爲金章宗學士。太和正音譜謂、其仕元初製北曲、均失考也。明胡應麟少室山房筆叢、西廂記雖出唐人鶯鶯傳、實本金董解元。董曲今尚行世、精工巧麗、備極才情、而字字本色、言言古意、當是古今傳奇鼻祖、金一代文獻盡此矣。然其曲乃優人絃索彈唱者、非搬演雜劇也。後略。

又云、西廂記一本六十種曲本　元王實父撰。關漢卿續。藝苑卮言、西廂久傳爲關漢卿撰、邇來乃有以爲王實夫者、謂至鄭亭而止。又云、至碧雲天黃花地而止。此後乃漢卿所補也。初以爲好事者傳之妄、及閱太和正音譜、王實夫十三本以西廂爲首、漢卿六十一本不載西廂、亦可據。　維業雍熙樂府卷十九、有滿庭芳西廂千詠、反謂漢卿撰而實夫續成之、可見明人之於西廂未有定論也。」王國維『宋元戲曲史』第十章云、關漢卿十三本　崔鶯鶯待月西廂記第五劇(明歸安凌氏覆周定王刊本　近貫池劉氏覆凌本。他本皆改易體例、不足信據。南濠詩話、藝苑卮言皆以第五劇爲漢卿作是也。)」「西廂記王撰關續」說について青木正兒『元人雜劇序說』第五章第一節が「『西廂記』は五本二十一折より成る長篇の雜劇で、前四本が王實甫の作、後一本は關漢卿の續作と爲す說が、明の都穆の『南濠詩話』

王世貞の『藝苑卮言』以來殆ど通説となつて居る。元人の「錄鬼簿」には王實甫の條に西廂記を列して居り、明初の『太和正音譜』越調小路絲娘に「王實甫西廂記第十七折」を引いてある。此に據れば古くより前四本が王實甫の作とされて居たことは窺はれるが、但だ第五本を關漢卿の續作とする説は確かでない。然し第五本は前四本に比して曲辭が質朴であるので、其の筆致の上から之を別人の續作とする明人の説は首肯せられる。」と述べて以來、「關續」を疑うのが通説となっている。

又云、南西廂一本右見曲品曲海目　右五種〔省略四種〕明陸采撰、采字子元、號天池、長洲人。

又云、南西廂一本六十種曲本　明李日華撰。日華字君實、嘉興人、萬歷壬辰進士、官至太僕寺少卿。」『曲海總目提要』卷七。

又云、錦西廂一本一作翻西廂　六十種曲本　明周公魯撰、公魯字公望、崑山人。」『曲海總目提要』卷十一。

又卷五云、竟西廂一本傳奇彙考作錦西廂　右十四種〔省略十三種〕國朝周坦綸撰、坦綸號果庵、里居未詳。

又云、翻西廂一本見曲海　右二種〔省略一種〕國朝研雪子撰。

又云、後西廂一本、無名氏撰。

又卷三云、續西廂一本見曲考　國朝查繼佐撰。繼佐字伊璜、號東山、海甯人。」『曲海總目提要』卷二十。以上魯迅の擧げるものは『曲錄』の範圍を出ない。このうち『竟西廂』は佚して傳わらない。「西廂」を稱するものや、それに因む作品はその後の調べで大幅に增えている。邵曾祺編著『元明北劇總目考略』（中州古籍出版社・一九八五）一〇九―一〇頁、趙景深著『中國小說史略疏證』（陝西人民出版社・一九八七）等參照。

5 李公佐字顯蒙、以至則別一人也。　（三十二）

寫印本『大略』八には經歷についての記述がない。鉛印本では『史略』に見られる『唐書』宣宗紀による記事がない他は、わずかな字句の異同を除いて『史略』に同じい。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴全集卷十云、李公佐所作小說、今有四篇『太平廣記』中、其影響于後來者甚鉅、而作者之生平顧不易詳。從文中所自述、得以考見者如次。

貞元十三年、泛瀟湘蒼梧。(「古嶽瀆經」)十八年秋、自吳之洛、暫泊淮浦。(「南柯太守傳」)

元和六年五月、以江淮從事受使至京、回次漢南。(「馮媼傳」)八年春、罷江西從事、扁舟東下、淹泊建業。(「謝小娥傳」)冬、在常州。(「經」)九年春、訪古東吳、泛洞庭、登包山。(「經」)十三年夏月、始歸長安、經泗濱。(「謝傳」)

『全唐詩』末卷有李公佐僕詩。其本事略謂公佐舉進士後、爲鍾陵從事。有僕夫執役勤瘁、迨三十年。一旦、留詩一章、距躍凌空而去。詩有「顓蒙事可親」之語、注云、「公佐字顓蒙、」疑卽此公佐也。然未知『全唐詩』采自何書、度必出唐人雜說、而尋檢未獲。『唐書』(七十)宗室世系表有千牛備身公佐、爲河東節度使說子、靈鹽朔方節度使公度弟、則別一人也。『唐書』宣宗紀載有李公佐、會昌初、爲楊府錄事、大中二年、坐累削兩任官、卻似顓蒙。然則此李公佐蓋生于代宗時、至宣宗初猶在、年幾八十矣。惟所見僅孤證單文、亦未可遽定。」汪辟疆『唐人小說』南柯太守傳按語云、撰人李公佐、史不詳其生平。據「本傳」及「謝小娥傳」「馮媼傳」「古嶽瀆經」等篇、大約爲貞元元和間人。杜光庭『神仙感遇傳』(見『道藏』恭字七號)卷三、有李公佐一條云、「李公佐舉進士、後爲鍾陵從事。有僕夫、自布衣執役勤瘁、晝夕恭謹、迨三十年、公佐不知其異人也。一旦告去、留詩一章。其辭曰〝我有衣中珠、不嫌衣上塵。我有長生理、不厭有生身。江南神仙窟、吾當混其眞。不嫌市井喧、來救人間人。蘇子跡已往(注云、蘇耽是也。)顓蒙事可親。(注云、公佐字顓蒙。)莫言東海變、天地有長春。〟自是而去、出門不知所之。隣里見其距躍凌空而去。」全唐詩末卷、收李公佐僕詩、卽本於此、而不載其所出。後略。」初版本、新版同。

『新唐書』卷一八下宣宗紀云、「大中二年」二月、制劍南西川節度、光祿大夫、檢校吏部尚書、同平章事、成都尹、上柱國、

隴西郡開國公、食邑二千戶李回責授湖南觀察使、桂州刺史、御史中丞、桂管防禦觀察使鄭亞貶循州刺史、前淮南觀察判官魏鋼貶吉州司戶、陸渾縣令元壽貶韶州司戶、殿中侍御史蔡京貶澧州司馬。御史臺奏、

據三司推勘吳湘獄、謹具逐人罪狀如後、揚州都虞候盧行立、劉稟、於會昌二年五月十四日、於阿顏家喫酒、與阿顏母阿焦同坐、稟自擬收阿顏爲妻、妄稱監軍使處分、要阿顏進奉、不得嫁人、兼擅令人監守。其阿焦遂與江都縣尉吳湘密約、嫁阿顏與湘。劉稟與押軍牙官李克勳卽時遮欄不得、乃令江都百姓論湘取受、節度使李紳追湘下獄、計贓處死。具獄奏聞。朝廷疑其冤、差御史崔元藻往揚州按問、據湘雖有取受、罪不至死。李德裕黨附李紳、乃貶元藻嶺南、取淮南元申文案、斷湘處死。今據三司使追崔元藻及淮南元推判官魏鋼并關連人款狀、淮南都虞候劉稟、元推判官魏鋼、典孫貞高利錢倚黃嵩、江都縣典沈頊陳宰、節度押牙白沙鎭遏使傅義、左都虞候盧行立、天長縣令張弘思、典張洙清陳迴、右厢子巡李行璠、典臣金弘擧、送吳湘妻女至澧州取受錢物人潘宰、前揚府錄事參軍公佐、元推官元壽吳珙翁恭、太子少保分司李德裕、西川節度使李回、桂管觀察使鄭亞等、伏候敕旨。

其月、敕、

李回、鄭亞、元壽、魏鋼已從別敕處分。李紳起此冤訴、本由不眞、今旣身歿、無以加刑。粗塞衆情、量行削奪、宜追奪三任官告、送刑部注毀。其子孫稽於經義、罰不及嗣、並釋放。李德裕先朝委以重權、不務絕其黨庇、致使冤苦、直到于今、職爾之由、能無恨歎。昨以李威所訴、已經遠貶、俯全事體、特爲從寬、宜準去年敕令處分。張弘思、李公佐卑吏守官、制不由己、不能守正、曲附權臣、各削兩任官。崔元藻曾受無辜之貶、合從洗雪之條、委中書門下商量處分。李恪詳驗款狀、蠹害最深、以其多時、須議減等、委京兆府決脊杖十五、配流天德。李克勳欲收阿顏、決脊杖二十、配流硤州。劉稟據其款狀、合議痛刑、曾効職官、不欲決脊、決臀杖五十、配流岳

州。其盧行立及諸典吏、委三司使量罪科放訖聞奏。

魯迅は『新唐書』宗室世系表に出る「千牛備身公佐」と「南柯太守傳」の李公佐とは別人であるとし、汪辟疆『唐人小說』も「此公佐或另爲一人」とする。これに對して内山知也「李公佐『南柯太守傳』その他の小說」(『唐代小說研究』木耳社・昭和五二)では、主に(内山氏は理由を三つあげるが、その他の二つは必ずしも千牛備身公佐でなくとも可能なので略す)千牛備身公佐の父李說の生卒年(七四〇―八〇〇)數と『唐會要』に見える貞元七年(七九一)、千牛衞採用の記事から、千牛備身公佐の生年を代宗大曆十三年(七七八)ごろとし、大中二年(八四八)には七十一歲であったと推定する。そして白行簡の年齡(七七四―八二六)とも合うところから、千牛備身公佐は「南柯太守傳」等の作者たる李公佐と同一人であると考える。この推定によれば確かに生存期間の點では障碍がないように見える。しかしながら『唐會要』卷七二の記事は「貞元七年十二月五日、兵部奏事條、取門地淸華、容儀整肅、年十一已上、十四已下、試讀一小經、兼薄解弓馬。」というもので、後には有資格者の規定が續き、そして勅旨は「依奏」となっている。したがってこの記事は、少なくとも貞元七年以後は上奏されたような制度で任用が行なわれたということを示すだけのものであって、千牛備身公佐の千牛衞任用と直接結びつく條件はほとんど何もない。千牛衞という機構が存在している限り、そこの要員の任用が貞元七年以前も以後も行なわれて来たのはいうまでもないからである。その點でこの記事を千牛備身公佐の年齡推定の根據とするにはあまりに要件を缺いている。

ところで『直齋書錄解題』卷五雜史類には「李公佐」なる人物の書として『建中河朔記』を擧げる。全文は「建中河朔記六卷　唐李公佐撰。序言與從弟正封讀國史至建中貞元之際、序述河朔故事、未甚詳備、以舊聞於老僧智融及谷況燕南記所說略同、參錯會要、以補史闕。」というものである。『建中河朔記』は『新唐志』には著錄されず、『直

齋書錄解題』がはじめてで、その後は『宋志』傳記類に著錄されるのみで以後姿を消すから、おそらく金元の時代に失われたのであろう。失われた書物のことをあげつらってもしかたがないのだが、直齋が摘記した序の中に一、二手がかりになることがある。老僧智融や谷況については詳しいことは分らない。ただ谷況の『燕南記』は『新唐志』が雜史類に「谷況燕南記三卷張孝忠事」と著錄し、『直齋書錄解題』も『建中河朔記』の前に並べて「燕南記三卷、唐恒州司戶魏郡谷況撰。專記成德一鎭事。自建中二年至太和七年、起張孝忠、終王承元。古語有燕南垂趙北際、今以其在燕之南、故名。然河北諸鎭連叛事跡、大略具矣。」と記す。これによれば『建中河朔記』は少なくとも太和七年（八三三）以降に成ったことになる。そして書物の内容も作者らにとっては所聞の世の事であり、作者らが中唐も後期に生きた人であることが分る。もう一つは「從弟正封」である。この人物がもし『新唐書』宰相世系表に登場する「字は中護、監察御史」に相當するのであれば、もう少しのことが分る。彼は丹楊房李靖の弟客師の五代の孫で、『登科記考』によれば元和二年丁亥の進士で、白行簡と同年であり、さらに翌年博學宏詞科にも及第した。そして『舊唐書』卷一七〇裴度傳に「元和十二年……奏刑部侍郎馬總爲宣慰副使、太子右庶子韓愈爲彰義行軍司馬、司勳員外郎李正封、都官員外郎馮宿、禮部員外郎李宗閔等爲兩使判官書記等、皆從之」（同樣の記事は『舊唐書』憲宗紀、『新唐書』裴度傳にも見える。）とあり、裴度統率のもと韓愈らの幕下にあって淮西平定のために出陣した。この時の出先の城における韓愈との聯句「晩秋郾城聯句」（『全唐詩』卷三四七）が殘っている。さらに『唐郎官石柱題名』には、司勳員外郎のみならず司勳郎中にも李正封の名が見える。かれは太和中に中書舍人だったという說（『唐詩紀事』卷四〇）もあり、一應身分のある人間であったからこそ、「李公佐」も『建中河朔記』の序に引いたのだろう。假定に假定を重ねることになるが、もし『建中河朔記』の李公佐が傳奇作家李公佐であるならば、内山氏の「傳奇作家

李公佐＝千牛備身公佐」説はさらに成立たない。同じく隴西の李氏であっても家系がちがうからである。そしてわたしの考えでは『建中河朔記』の李公佐が傳奇作家でもある蓋然性はかなり高いと思う。まず生存時期の手がかりが魯迅の擧げるものと、『建中河朔記』から考えられるものとが齟齬を來たさない。それに、失われたとはいえ、『建中河朔記』は『新唐志』、『直齋書錄解題』に於いて、鄭處誨『明皇雜錄』、鄭棨『開天傳信記』、姚汝能(『解題』作龍)『安祿山事迹』、李德裕『次柳氏舊聞』などと同列に並んでいることから考えると、瑣記、逸聞の類であった可能性が大きい。後世小説と混同されるような一群の作品の中にある以上は、傳奇をものした文才は『建中河朔記』の執筆に決して負の方向には働らかなかったであろう。ただ殘された傳奇四篇の舞臺がすべて江南であるのに對して、『建中河朔記』はその名が示すとおり河東の叛亂を扱うものだが、それは題材が異るためと考えるしかない。一方千牛備身公佐の方は生存の時期は一致しても、彼自身に著作があったという證據は何一つない。以上のようなことを考慮すれば、魯迅の判斷は、いまではどういう論據によるものか明らかにできないけれども、結果的には誤っていないと思われる。なお程毅中『古小説簡目』がすでに『書錄解題』の『建中河朔記』に言及し、傳奇作家の李公佐と同一人の著作と斷じている。九〇・一二・四初校時記。

6 其著作今存四篇、以至已非『枕中』之所及矣　　六一一〇

寫印本『大略』八云、李公佐南柯太守傳（廣記四百七十五題淳于棼、今據唐語林改正。）東平淳于棼、呉楚游俠之士、家廣陵郡東十里。所居宅南有大古槐一株。貞元七年九月因沈醉致疾、二友扶生歸家、臥于東廡之下。

二友謂生曰子其寢矣余將秣馬濯足俟子小愈而去至（生）解日（巾）就枕昏然忽忽髣髴若夢見二紫衣使者跪拜生曰槐安國王遣小臣致命奉邀生不覺下榻整衣隨二使至門見青油小車駕以四牡左右從者七八扶生上車出戸指古槐穴而去使者卽驅入穴中生意頗甚異之不敢致問忽見山川風候草木道路與人世甚殊而前行數十里有郛郭城堞……又入大城朱門

重樓々上有金書題曰大槐安國。

生旣至、拜駙馬、先就賓宇。

是夕羔雁幣帛威容儀度妓樂絲竹聲膳灯燭車騎禮物之用無不咸備有辇女或稱華陽姑或稱青溪姑或稱上仙子或稱下仙子若是者數輩皆侍從數十冠翠鳳冠衣金霞帔綵碧金鈿目不可視遨遊戲樂往來其門爭以淳于郎爲戲弄風態妖麗言詞巧豔生莫能對

後出爲南柯太守、守郡三十載、風化廣被、百姓歌謠、建功德碑、立生祠宇王甚重之、遞遷大位生五男二女是歲將兵與檀羅國仗、敗績、公主又薨、生罷郡、而威福日盛、王疑憚之、遂禁生遊從、處之私第。已而送歸、旣醒、

見家之僮仆擁篲于庭二客濯足于榻斜日未隱于西垣餘樽尚湛于東牖夢中倏忽若度一世矣 …… 公佐輯編保〔錄〕成傳以資好事雖稽神語怪事涉非經而窃位著生冀將爲戒後之君子幸以南柯爲偶然無以名位驕于天壤間云

前華州參軍李肇贊曰貴極祿位權傾國都達人視此蟻聚何殊

此傳及沈旣濟枕中記文意雖繁、而非獨創、焦湖廟祝以玉枕使楊林入夢、及蟻有臺宇題額之事已見于干寶搜神記矣。然明人湯顯祖之邯鄲南柯二記、則本此二篇。鉛印本は『史略』に同じ。

「小說的變遷」第三講云、二、李公佐的著作　李公佐向來很少人知道、他做的小說很多、現在只存有四種。（一）『南柯太守傳』。此傳最有名、是叙東平淳于棼的宅南、有一棵大槐樹、有一天棼因醉臥東廡下、夢見兩箇穿紫色衣服的人、來請他到了大槐安國、招了駙馬、出爲南柯太守。因有政績、又累升大官。後領兵與檀羅國戰爭、被打敗、而公主又死了、于是仍送他回來。及醒來則剎那之夢、如度一世。而去看大槐樹、則有一螞蟻洞、螞蟻正出入亂走着、所謂大槐安國、南柯郡、就在此地。這篇立意、和『枕中記』差不多、但其結穴、餘韵悠然、非『枕中記』所能及。後來明人

湯顯祖作『南柯記』、也就是從這傳演出來的。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴全集卷十云、「南柯太守傳」出『廣記』四百七十五、題「淳于棼」、注云出『異聞錄』。傳是貞元十八年作、李肇爲之贊、卽綴篇末。而元和中肇作『國史補』、乃云「近代有造謗而著者、雞眼苗登二文。有傳蟻穴而稱者、李公佐「南柯太守」。有樂伎而工篇什者、成都薛濤、有家僮而善章句者、郭氏奴（不記名。）皆文之妖也。」（卷下）約越十年、遂詆之至此、亦可異矣。棼事亦頗流傳、宋時、揚州已有南柯太守墓、見『輿地紀勝』（三十七淮南東路）引『廣陵行錄』。明湯顯祖據以作『南柯記』、遂益廣傳至今。

王讜『唐語林』卷二文學云、中世有造謗辭而著者、雞眼、苗登二文。有傳蟻穴而稱者、李公佐南柯太守傳。有妓樂而工篇什者、蜀妓薛濤。有家僮而善著章句者。郭氏奴、不記名。皆事之異也。『唐語林校證』本一八三頁、この部分は李肇の『國史補』から援引したものだが、原文では「有傳蟻穴而稱、李公佐南柯太守」となっていて「傳」字がない。

王象之『輿地紀勝』卷三七淮南東路揚州云、古迹、南柯太守墓、淳于棼家于廣陵、宅南有古槐。夢槐安國王邀入穴中、令娶其女曰金枝公主、居修儀宮。令理南柯郡。覺乃一古槐耳。今俗呼棼墓爲南柯太守墓。廣陵志。粤雅堂本では引用のごとく「廣陵志」となっていて、「廣陵行錄」ではない。「廣陵行錄」は書目類にも出ず、いかなる書か不明。

王國維『曲錄』卷四云、南柯記一本六十種曲本　右五種明湯顯祖撰。後略。」『曲海總目提要』卷六。

7 所引『南柯太守傳』　　八三十七

寫印本での引用は前條6に見えるとおり、大幅に『史略』とは異る。鉛印本は『史略』に同じ。

「城郭殿臺之狀」『廣記』各本は皆な「臺殿」と逆に作るが、鉛印本から以後各版すべて「殿臺」とする。筆誤の可能性がある。

「槐安國都是也」『廣記』各本「是」字なく、鉛印本、『史略』初版にもなく、合訂再版で附加された。

「不欲令二客壞之」『廣記』各本に「令」字はないが、鉛印本以降各版みな「令」字を附す。『唐宋傳奇集』では『廣記』各本のように「臺殿」に作り、「是」も「令」字も附加していないから、これらはいずれも筆誤と考えてよいだろう。

8 『謝小娥傳』、以至（見『拍案驚奇』十九）　八三―七

「小說的變遷」第三講云、（二）『謝小娥傳』。此篇叙謝小娥的父親、和她的丈夫、皆往來江湖間、做買賣、爲盜所殺。小娥夢父告讐人爲「車中猴東門草」。又夢夫告以讐人爲「禾中走一日夫」。人多不能解、後來李公佐乃爲之解說、「車中猴、東門草」是「申蘭」二字、「禾中走、一日夫」是「申春」二字。後果然因之得盜。這雖是解謎獲賊、無大理致、但其思想影響於後來之小說者甚大、如李復言演其文入『續玄怪錄』、題曰「妙寂尼」、明人則本之作平話。他若『包公案』中所叙、亦多有類此者。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴全集卷十云、『謝小娥傳』出『廣記』四百九十一、題李公佐撰。不著所從出、或嘗單行歟、然史志皆不載。唐李復言作『續玄怪錄』、亦詳載此事、蓋當時已爲所豔稱。至宋、遂稍譌異、『輿地紀勝』（三十四江南西路）記臨江軍人物、有謝小娥、云、「父自廣州部金銀綱、攜家入京、舟過霸灘、遇盜、全家遇害。小娥溺水、不死、行乞于市。後傭于鹽商李氏家、見其所用酒器、皆其父物、始悟向盜乃李也。心銜之、乃置刀藏之、一夕、李生置酒、擧室酣醉。娥盡殺其家人、而聞于官。事聞諸朝、特命以官。娥不願、曰、〝已報父仇、他無所事、求小庵修道。〟朝廷乃建尼寺、使居之、今金地坊尼寺是也。」事迹與此傳似是而非、且列之李邕與傅霽之間、殆已以小娥爲北宋末人矣。明凌濛初作通俗小說（『拍案驚奇』十九）、則據『廣記』。『輿地紀勝』の記事はここに引くのが全文である。

李復言『續玄怪錄』に入れられたのは、「尼妙寂」と題する一篇で、『太平廣記』巻一二八に「出續玄怪錄」として收錄。これは明抄本『說郛』巻一五も明の陳應翔刊本『幽怪錄』（中華書局古小說叢刊『玄怪錄・續玄怪錄』一九六一）もともに牛僧孺撰『玄怪錄』に編入しているが、文中に「太和庚戌歲、復言隴西李遊巴南、與進士沈田會於蓬州、因話奇事、持以相示、一覽而復之。錄怪之日、遂纂於此焉。」とあるのによって『續玄怪錄』中の一篇たることは明らかである。

『新唐書』列女傳には「段居貞妻傳」として「謝小娥傳」によって傳を立てている。

寫印本は「謝小娥傳」には觸れない。鉛印本は『史略』にほぼ同じだが、文末を「宋人則本之作平話、後來記包拯侫斷案、類此者更多矣。」とする。そして『史略』初版では「（見「拍案驚奇」十九）」を挿入して「宋人」を「明人」と變えた。再版以後は「後來」以下の語句を削除して現行の形となった。

9 所餘二篇、以至故文亦不華　　八四十七

寫印本は『盧江馮媼』に言及しない。

鉛印本『大略』八云、其餘二篇、未詳原題、廣記則題曰盧江馮媼（三百四十三）、曰李湯（四百六十七）。馮媼記董江妻亡更娶、而媼見有女泣路隅一室中、後乃知卽亡人之墓、董聞則罪以妖妄、逐媼去之、其事甚簡、故文亦不華。

『史略』初版から六版に至るまで鉛印本と同じで、訂正版に至って現行のように改められた。

「小說的變遷」第三講云、（四）『盧江馮媼』。此篇敘事很簡單、文章也不大好、我們現可以不講它。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴全集巻十云、「盧江馮媼傳」出『廣記』三百四十三、注云出『異聞傳』。事極簡略、與公佐他文不類。然以其可考見作者踪跡、聊復存之。『廣記』舊題無傳字、今加。『異聞傳』に出づとするのは字誤で、『太平廣記』各本

『異聞錄』とする。しかしこれも字誤で、巻四七五「淳于棼」同様正しくは『異聞集』とすべきである。これに關しては王夢鷗「陳翰異聞集考論」（『唐人小說研究』二集所收）に詳しい。

10 其一曰『古嶽瀆經』、以至如下文　　㊀十一

寫印本『大略』は『古嶽瀆經』に言及しない。鉛印本および『史略』第六版までは篇名を『廣記』に「李湯」とするままを引くので、『史略』が「其一曰『古嶽瀆經』（見『廣記』四百六十七、題曰「李湯」）、有李湯者」とする末の三字を除く部分がちがうほかはみな『史略』訂正版に同じ。

「小說的變遷」第三講云、（三）李湯。此篇叙的是楚州刺史李湯、聞漁人見龜山下、水中有大鐵鎖、以人牛之力拉出、則風濤大作、并有一像猿猴之怪獸、雪牙金爪、闖上岸來、觀者奔走、怪獸伊拉鐵鎖入水、不再出來。李公佐爲之解說、怪獸是淮渦水神無支祁。「力逾九象、搏擊騰踔疾奔、輕利倏忽。」大禹使庚辰制之、頸鎖大索、徙到淮陰的龜山下、使淮水得以安流。後略。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴全集卷十云、「古嶽瀆經」出『廣記』四百六十七、題爲「李湯」、注云出『戎幕閒談』、『戎幕閒談』乃韋絢作、而此篇是公佐之筆甚明。元陶宗儀『輟耕錄』（二十九）云、「東坡「濠州塗山」詩〝川鎖支祁水尙渾〟注、〝程演曰、『異聞集』載「古嶽瀆經」、禹治水、至桐柏山、獲淮渦水神、名曰巫支祁。〟」其出處及篇名皆具、今卽據以改題、且正『廣記』所注之誤。經蓋公佐擬作、而當時已被其淆惑。李肇『國史補』（上）卽云、「楚州有漁人、忽于淮中釣得古鐵鎖、挽之不絕。以告官。刺史李湯大集人力、引之。鎖窮、有青獼猴躍出水、復沒而逝。後有驗『山海經』云、水獸好爲害、禹鎖于軍山之下、其名曰無支祁。」驗今本『山海經』無此語、亦不似逸文。肇殆爲公佐此作所誤、又誤記書名耳。且亦非公佐據『山海經』逸文、以造「嶽瀆經」也。至明、遂有人徑收之『古逸書』中。胡應麟

(『筆叢』三十二) 亦有說、以爲「蓋卽六朝人踵『山海經』體而贋作者。或唐人滑稽玩世之文、命名岳瀆可見。以其說頗詭異、故後世或喜道之。宋太史景濂亦稍隱括集中、總之以文爲戲耳。羅泌『路史』辯有無支祁。世又譌禹事爲泗州大聖、皆可笑。」所引文亦與『廣記』殊有異同。禹理水作禹治淮水。走雷作迅雷。石號作水號。五伯作土伯。搜命作授命。千作等山、白首作白面。奔輕二字無。聞字無。章律作童律、下重有童律二字。鳥木由作烏木由、下亦重有三字。庚辰下亦重有庚辰字。桓下有胡字。聚作叢。以數千載作以千數。大索作大械。末四字無。頗較順利可誦識。然未審元瑞所據者爲善本、抑但以意更定也、故不據改。

陶宗儀『南村輟耕錄』卷二九云、泗州塔下、相傳泗州大聖鎖水母處、繆也。按地志云、水神在臨淮縣龜山之下、形若獼猴、縮鼻高額、青軀白首、金目雪牙、頸伸百尺、力踰九象。禹獲之、鎖其頸於龜山之足。淮水乃安流注海。邇來漁者知鎖所在。古嶽瀆經云、禹治水、三至桐柏、獲淮渦水神曰無支祁、乃命庚辰制之。鎖于龜山之足、淮水乃安。唐永泰初、楚州有漁人、夜釣山下、其鈎爲物所製、沈水視之、見大鐵鎖繞山足、一獸形如青猿、兀若昏醉、涎沫腥穢、不可近。又東坡濠州塗山詩、川鎖支祁水尙渾。註、程演曰、異聞集載古嶽瀆經、禹治水、至桐柏山、獲淮渦水神、名曰巫支祁、善應對、辯淮之淺深、源之遠近、而神曰庚辰者、鎖於龜山之足、淮乃安流。唐時有漁者釣得一古鎖牽出、其末有如獼猴者、蓋此物也。國史補曰、楚州漁人於淮中釣得古銅鎖、刺史李陽大集人力引之、鎖窮有獼猴躍出水而逝。山海經水獸、好爲雲雨、禹鎖於軍山之下、其名曰無支祁。

11 所引『古嶽瀆經』 (四十五)

『魯迅增田涉師弟答問集』第一〇頁云、〔増田「禹授之童律」の「之」を指して問曰〕命(?)ト云フ意デスカ〔魯迅答曰〕之ハ無支祁ヲ征服スル〔増田問曰〕「鴟脾桓胡木魅水靈山祇石怪」コレラノ怪物ハ禹ノ手下デスカ?〔魯

迅答曰」yes！〔增田「以數千載」の「載」を指して問曰」年（？）デスカ？〔魯迅答曰〕或ル版本ニハ「計」トナッテ居マス。本文ノ下ニ（一作計）ト入レテ數千程ト譯シテ居タライヽデショウ〔「庚辰之後」とあってたぶん意味を訊ねたのだろう。魯迅答曰〕庚辰之日デス。本文モ「庚辰ノ日」トスベシダ。「後」トハ作者ノ有意ノ誤ダラウ。〔又曰〕コレハ僞古文ダカラワザト間違ダラケノ様ニシテ居ルノデス。

「以數千計」について增田氏は『支那小說史』に魯迅の示唆通り（一作計）としているが、「計」に作るテキストは未見。

『支那小說史』第九注云、備考、本文は古怪な僞古文であるが、わざと文字語法を間違へたり、晦澁にしたりしてゐるらしい迹が見える。

『史略』所引の「古嶽瀆經」は、『廣記』に據った『唐宋傳奇集』とも異り、現存の各テキストにも合わないところがある。異同の箇所を列記すると次表のようになって、これから察するに、『史略』の「古嶽瀆經」は『廣記』をもとに、『少室山房筆叢』卷三二所引を參考に、魯迅が意を以て校定したものらしい。

『廣記』	『路史』餘論卷九	『筆叢』	『繹史』卷十一	『史略』	『傳奇集』
禹理水	禹治淮水	禹治水	禹理水	禹理水	禹理水
走雷	迅雷	迅雷	迅雷	走雷	走雷
石號	石號	水號	石號	石號	石號
五伯	土伯	土伯	五伯	土伯	五伯
不能興	功不能興	功不能興	不能興	功不能興	不能興

搜命　搜命　授命　授命　授命　搜命

千君長　等千君長千『備要』本作于。　等山君長　于君長千、于不能判讀。　等山君長　千君長

章商氏　彰商氏　兜氏盧氏　黎婁氏廣雅書局本作犁婁氏　商章氏　兜氏盧氏　章商氏　章商氏

兜盧氏　兜氏盧氏　無支祈　無支祈　兜氏盧氏　犁婁氏　兜盧氏　兜盧氏

犁婁氏　犁婁氏　淺深　深淺　犁婁氏　巫支祈　名無支祁　名無支祁

名無支祁　無支祈　猨猴　猨猴廣雅書局本作猨猻　淺深　淺深　淺深　淺深

淺深　淺深　白首　白首廣雅書局本作白面　白首　猨猴　猨猴　猨猴

猿猴　猨猴　雪牙　雪牙　雪牙　白首　白首　白首

白首　白首　騰踔　騰踔　騰踔　雪牙　雪牙　雪牙

雪牙　雪牙　騰趠　騰趠　騰踔　騰踔　騰踔　騰踔

騰踔　騰趠　無奔輕二字　無奔輕二字　疾奔輕利　疾奔輕利　疾奔輕利　疾奔輕利

疾奔輕利　無奔輕二字　視　視　聞視　聞視　聞視　聞視

聞視　視　童律童律　同上　童律　童律　童律　章律

章律　童律童律　烏木田烏木田　烏木由烏木由　烏木田　烏木由　烏木由　烏木由

烏木由　烏木田烏木田　庚辰庚辰　庚辰庚辰　庚辰　庚辰　庚辰　庚辰

庚辰　庚辰庚辰　庚辰庚辰　庚辰庚辰　庚辰　庚辰　庚辰　庚辰

桓木魅水靈山妖　桓胡木魁水靈山妖　桓胡木魅水靈山妖　桓胡水魅山靈木妖　桓胡木魅水靈山祆　桓木魅水靈山祆

聚遶　叢繞者　叢繞者　聚繞　聚繞　聚遶

以數千載　以千數　以千數　以幾千數　以數千載　以數千載

以戰逐去　以戰逐去　以戰逐去　持戟逐去　以戰（一作戟）逐去　以戰逐去

大索　大械　大械　大索　大索　大索

徙之淮陰　徙之淮陰　徙之淮陰　徙之淮陽　徙淮陰　徙淮陰

龜山之足下　龜山之足　龜山之足　龜山足下　龜山之足下　龜山之足下

俾淮水　俾淮水　俾淮水　淮水　俾淮水　俾淮水

永安流注海也　無流注海也四字　無流注海也四字　無注海也三字　永安流注海也　永安流注海也

庚辰之後以下三句　無　無　無　有　有

『太平寰宇記』卷一六泗州云、淮渦神在龜山之下。淮陽記、按古嶽瀆經云、禹治水、三至桐柏山、乃獲淮渦水神、名曰無支祁。喜應對言語、辨江淮之淺深、原顯之遠近、形若獼猴、縮鼻高額、青軀白首、金目雪牙、頭伸百尺、力踰九象、搏擊騰踔、疾奔輕利、若倏忽間、人視之不可久。禹授之童律、童律不能制。授之烏木田、烏木田不能制。授之庚辰、庚辰能制。鵜脾柏三字不可解、或有脫誤。木魅水靈、火妖石怪、奔號叢繞、以千數。庚辰以戟逐去、遂頸鎖大索、鼻穿金鈴、徙淮泗陰、鎖龜山之足。淮水乃安流注於海。後唐永泰初年、□湯任楚州刺史、時有漁人夜釣於龜山之下。其鈎爲物所制不復出、漁者健水、沈沒於底可五十丈、見大鐵鎖盤龜山足、尋不知極。漁人遂告湯、湯命漁人及能水者數十人獲其鎖、力不能制、加以大牛五十頭、鎖乃振動、稍就岸。時天無風、驚波浪飜、觀者大駭、緣之鎖末見一獸、

狀如靑猿、白首長鬚、雪牙金爪。闖然出岸、高五丈許、蹲踞起伏若獼猴。但兩目不能視、兀若昏醉。耳目口鼻、水流如泉、涎沫腥穢不可近。久乃引頸伸欠、雙眸忽開、光彩若電、視人輒欲狂怒。觀者奔走、獸亦徐徐引鎖拽牛沒於水去。時楚多名士、與湯相顧愕然不知其由。獸竟不復見、邇來漁者時知鎖所在。『史略』引用文中「(一作戮)」とするのは、これや『天中記』卷九「淮」に引く「古嶽瀆經」、また後に『繹史』の引用に見られるように『廣記』所收のものとは系統の異るテキストがあったのだろうが未詳。

12 宋朱熹、以至故事遂以堙昧也 ㊀五十七

鉛印本『大略』は「『楚辭辨證』中」を括孤に入れず、「元吳昌齡『西遊記』雜劇中」を「元人『西遊記』(有數齣在『納書楹曲譜』中)」とするほかは『史略』訂正版以降に同じ。『史略』初版から六版までは鉛印本と變らない。魯迅が『納書楹曲譜』の收錄する數齣の『西游記』を「元人」の作と考えたのは、元の吳昌齡に『唐三藏西天取經』という雜劇があった(『曲錄』卷二)からであろう。現に『納書楹曲譜』中の二齣は吳昌齡の「唐三藏」と認められている。それを直ちに「吳昌齡」としなかったのは「唐三藏」と「西游記」と名がちがったためか。後訂正版で「元吳昌齡『西游記』雜劇」と改めたのは、日本で『楊東萊評吳昌齡西游記』が發見され、鹽谷氏の手で景印排印されて中國にもたらされたからである。一九二八年二月二十三日の「日記」に「鹽谷來上海、贈雜劇西游記五本」とある。後になって『續錄鬼簿』が發見されて、この書は吳昌齡のではなくて、明初の楊訥の撰ということになった。(孫楷第「吳昌齡與雜劇西游記」『滄州集』下冊所收)その中の「巫支祁」についてのことばは、後にあげる胡適「西游記考證」が引いている。

「小說的變遷」第三講云、這篇影響也很大、我以爲『西游記』中的孫悟空正類無支祁。但北大教授胡適之先生則以爲是由印度傳來的。俄國人鋼和泰教授也曾說印度也有這樣的故事。可是由我看去、一、作『西游記』的人、并未看過佛

經。二、中國所譯的印度經論中、沒有和這相類的話。三、作者——吳承恩——熟于唐人小說、『西游記』中受唐人小說的影響的地方很不少。所以我還以爲孫悟空是襲取無支祁的。但胡適之先生仿佛并以爲李公佐就受了印度傳說的影響、這是我現在還不能說然否的話。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴（全集卷十）云、朱熹『楚辭辯證』（下）、「『天問』、鯀竊帝之息壤以湮洪水、特戰國時俚俗相傳之語、如今世俗僧伽降無支祁、許遜斬蛟蜃精之類。本無依據、而好事者遂假託撰造以實之。」是宋時先訛禹爲僧伽。王象之『輿地紀勝』（四十四淮南東路盱眙軍）云、「水母洞在龜山寺、俗傳泗州僧伽降水母于此。」則復訛巫支祁爲水母。褚人穫『堅瓠續集』（二）云、「『水經』載禹治水至淮、淮神出見。形一獼猴、爪地成水。禹命庚辰執之。遂鎖于龜山之下、淮水乃平。至明、高皇帝過龜山、令力士起而視之。因拽鐵索盈兩舟、而千人拔之起。僅一老猿、毛長蓋體、大吼一聲、突入水底。高皇帝急令羊豕祭之、亦無他患。」是又訛此文爲『水經』、且堅嫁李湯事于明太祖矣。

『楚辭辯證』（卷下天問）云、補注引山海經言、鯀竊帝之息壤以堙洪水、帝令祝融殛之羽郊。（中略）大氐古今說天問者、皆本此二書（山海經・淮南子）。今以文意考之、疑此二書本皆緣解此問而作、而此問之言、特戰國時俚俗相傳之語。如今世俗僧伽降無之祈、許遜斬蛟蜃精之類、本無稽據、而好事者遂假託撰造以實之。明理之士皆可以一笑而揮之、政不必深與辯也。

羅泌『路史』餘論（卷九）云、（古嶽瀆經原文を略す）而釋氏乃以爲泗州僧伽之所降水母者。惟僧伽以觀音大士應化於過去阿僧祇劫值如來三慧門入道以音聲而爲佛事、現化此土。如李邕之三碑、蔣之奇所三十六化近是。而水母之事非也。方永泰初李湯知山陽、物嘗出焉。詳予福地記。

宋濂『宋學士全集』（卷二八删古嶽瀆經云、維禹治水、三至桐柏山。鬻風迅雷、石號水鳴。五伯擁川、天老肅兵。雄干

持旄、龍鴻勅軒、闕不能興。禹乃震怒、召集百靈。蒐命夔龍、桐栢千君、稽首請命。罔不惟寅、神令所射、激如機槍。乃麾鴻蒙、乃囚章商。乃縶兜盧、皇威載揚。犁婁卒劉、勢不敢爭。彼無支祈、力踰九象叶。厥形肖蝯、目有電光、量淮度江、辨捷從衡。授之童律、童律莫當。授之烏木田、木田遂臧。授之庚辰、庚辰扼其、亢絡鐵繩、聲如犬羊。繫諸淮陰、龜山之傍。木魅水精、洞妖石祥。奔虺萬數、若有喪亡。淮流湯湯、入海既平、民用靖康、直達外方。至於陪尾、無壅弗通、率惟厥常、以昭於無疆。

世傳、元和九年、李公佐游洞庭、登包山、與隱者周焦君探林屋洞、得古嶽瀆經第八卷。今觀其文、雖奇而未醇、竊意即公佐焦君所造以玩世者、戲删潤其辭、集古鼎文寫之、以寄吳君濬仲。濬仲蓋深於古學者也。鑄竈器與方乳曲文大爲爭妍、其自知不可哉。丙申冬十一月、濂志。秀州公署刊本。

胡適「西遊記考證」『胡適文存』二集卷四云、(四)說到這裏、我要退回去、追叙取經故事裏這箇猴王的來歷。何以南宋時代的玄奘神話裏忽然插入了一個神通廣大的猴行者？這箇猴子是國貨呢？還是進口貨呢？

前不多時、周豫材先生指出『納書楹曲譜』補遺卷一中選的『西遊記』四齣、中有兩齣提到「巫枝祗」和「無支祁」。「定心」一齣說孫行者「是驪山老母親兄弟、無支祁是他姊妹」。又「女國」一齣說、「似摩騰伽把阿難攝在瑤山上、若鬼子母將如來圍定在靈山上、巫枝祁把張僧拏在龜山上。不是我魔王苦苦害眞僧、如今佳人個個要尋和尚。」

周先生指出、作『西遊記』的人或亦受這個巫枝祁故事的影響。我依周先生的指點、去尋這個故事的來源。『太平廣記』卷四六七「李湯」條下、引『古嶽瀆經』第八卷云、(既引從略。)

這個無支祁是一個「形若猿猴」的淮水神、『詞源』引『太平寰宇記』、說略同。周先生又指出朱熹『楚辭辨證』天問篇下有一條云、(既引、從略。)據此、可見宋代民間又有「僧伽降無之祈」的傳說。僧伽爲唐代名僧、死於中宗景龍四年

(七一〇)。他住泗州最久、淮泗一帶產生許多關于他的神話。(『宋高僧傳』十八、『神僧傳』七。)降無之祈大概也是淮泗流域的僧伽神話之一、到南宋時還流行民間。

但上文引曲詞裏的無支祁、明是一個女妖怪、他有「把張僧拏在龜山上」的神話。龜山卽是無支祁被鎖的所在、大概這個無支祁、無論是古的今的、男性女性、始終不曾脫離淮泗流域。這是可注意的第一點、因爲『西遊記』小說的著者吳承恩是淮安人。第二、『宋高僧傳』十八說、唐中宗問萬迴師、「彼僧伽者、何人也?」對曰、「觀音菩薩化身也。」「僧伽傳」說他有弟子三人、慧岸、慧儼、木叉。木叉又多顯靈異、唐僖宗時、賜謚曰眞相大師、塑像侍立於僧伽之左、若配饗焉。傳末又說「慧儼侍十一面觀音菩薩傍」。這也是可注意的一點、因爲在『西遊記』裏、惠岸和木叉已併作一人、成爲觀音菩薩的大弟子了。第三、無支祁被禹鎖在龜山足下、後來出來作怪、又有被僧伽(觀音菩薩化身)降伏的傳說。這一層和取經神話的猴王、和『西遊記』的猴王、都有點相像。或者猴行者的故事確曾從無支祁的神話裏得着一點暗示、也未可知。這也是可注意的一點。

以上是猜想猴行者是從中國傳說或神話裏演化出來的。但我總疑心這個神通廣大的猴子不是國貨、乃是一件從印度進口的。也許連無支祁的神話也是受了印度影響而仿造的。因爲『太平廣記』和『太平寰宇記』都根據『古嶽瀆經』、而『古嶽瀆經』本身便不是一部可信的古書。宋元的僧伽神話、更不消說了。因此我依着鋼和泰博士(Baron A. Von Staël Holstein)的指引、在印度最古的紀事詩『拉麻傳』(Rāmāyana)裏尋得一個哈奴曼(Hanumān)、大概可以算是齊天大聖的背影了。

中略。猴子國有一個大將、名叫哈奴曼、是天風的兒子、有絕大神通、能在空中飛行、他一跳就可從印度跳到錫蘭(楞伽)。他能把希瑪拉耶山拔起背着走。他的身體大如大山、高如高塔、臉放金光、尾長無比。中略。

有一次、哈奴曼飛向楞伽時、途中被一個老母怪(su-rasā)一口吞下去了。哈奴曼在這個老魔的肚子裏、心生一計、把身子變的非常之高大。那老魔也就不能不把自己的身子變大、後來越變越大、那妖怪的嘴張開竟有好幾百里闊了。哈奴曼趁老魔身子變的極大時、忽然把自己身子縮成拇指一般小、從肚子裏跳上來、不從嘴裏出去、却從老魔的右耳朵孔裏出來了。

又一次、哈奴曼飛到希瑪拉耶山（剛大馬達山）中去訪尋仙草、遇着一個假裝隱士的妖怪、名叫喀拉、是拉凡納的叔父受了密計來害他的。哈奴曼出去洗浴、殺了池子裏的一條鰐魚、從那鰐魚肚裏走出一個受謫的女仙。那女仙教哈奴曼防備喀拉的詭計、哈奴曼便去把喀拉捉住、抓着一條腿、向空一摔、就把喀拉的身體從希瑪拉耶山一直摔到錫蘭島、不偏不正、剛剛摔死在他的姪兒拉凡納的寶座上！

哈奴曼有一次同拉凡納決鬥、被拉凡納們用計把油塗在他的猴尾巴上、點起火來、那其長無比的尾巴就燒起來了。然而哈奴曼的神通廣大、他們不但沒有燒死他、反被哈奴曼借刀殺人、用他尾巴上的大火把敵人的都城楞伽燒完了。

我們舉這幾條、略表示哈奴曼的神通廣大、但不能多舉例了。哈奴曼保護拉麻王子、征服了楞伽的敵人、奪回西妲、陪他們凱回到阿約夢國。拉麻凱旋之後、感謝哈奴曼之功、賜他長生不老的幸福、也算成了「正果」了。

陶生(John Dowson)在他的『印度古學詞典』裏（頁一六）說、「哈奴曼的神通事蹟、印度人從少至老都愛說愛聽的。關於他的繪畫、到處都有。」除了拉麻傳之外、當第十世紀和第十一世紀之間（唐末宋初）、另有一部『哈奴曼傳奇』(Hanumān Nātaka)出現、是一部專記哈奴曼奇跡的戲劇、風行民間。中國同印度有了一千多年的文化上的密切交通、印度人來中國的不計其數、這樣一樁偉大的哈奴曼故事是不會不傳進中國來的。所以我假定哈奴曼是猴行者的根本。除上引許多奇跡外、還有兩點可注意。第一、『取經詩話』裏說、猴行者是「花果山紫雲洞八萬四千銅頭鐵額獼猴

王」。花果山自然是猴子國。行者八萬四千猴子的王、與哈奴曼的身分也很相近。第二、『拉麻傳』裏說哈奴曼不但神通廣大、並且學問淵深。他是一個文法大家、「人都知道哈奴曼是第九位文法作者。」『取經詩話』裏的猴行者初見時乃是一個白衣秀才、也許是這位文法大家墮落的變相呢！ 民國十二・二・四・改稿。

（一九九〇・七・八。）（待續）

「中國小說史略考證」第八正誤

4の最初の一節四行を、5の最初の一文「この部分は寫印本『大略』にはなく、鉛印本で增訂されたものである。」と入れ換える。